

お


り

え



無限なる線は、

角形でわり、



用也あり、

心あひ
手あひ

前回のむりえわではヘラクレイトスの「対立者の一致」（矛盾律違反）を取り上げたが、今回取り上げたニコラウス・クザーヌス（1401-1464）の「反対対立の一致 *oincidentia oppositorum*」とは、人間の認識能力においては対立することも合致することもありえないように見えるものが、無限を想定することで一致したり合致したりする、という思想である。

それをクザーヌスは、無限大の円を例にとって、次のように説明する。人間の通常の認識能力にとっては、直線と曲線は異なるものであるが、円の直径がしだいに大きくなるにつれて、その円の円周の曲率はしだいに小さくなり、直線に近づくであろう。その極限概念として無限大の円の円周を想定すれば、それは曲率が無限に小さいことになり、それゆえにそれは直線と同一であることになる。（『知ある無知』第一巻 13 章 34－36 頁）このようにして反対対立であるものも、それが最大あるいは無限にまで増大するならば「無限接近」という思考実験を経て、互いに一致したり合致するのだとクザーヌスは考えるのである。

クザーヌスの「反対対立の一致」の思想はパスカルの『パンセ』に引用され、ヘーゲルの弁証法の先駆ではないかという指摘もなされている。そして西田幾多郎は処女作『善の研究』での引用をはじめ、ほとんど終生にわたってクザーヌスに関心を抱き続けていた。

次回のむりえわでは、西田幾多郎の「対立の一致」（絶対矛盾的自己同一）をとりあげる。